



築造から2000年を迎える 古殿橋

大分・豊後大野市



1817(文化14)年架橋の古殿橋
大分県豊後大野市大野町北園、径間5.6m、橋幅1.8m、市指定有形文化財
アーチの奥には1920年に同じ径間で拡幅された古殿2号橋の輪石が見える
写真提供/中村まさあき

大分県豊後大野市の古殿橋(ふるとのばし)、同市大野町北園、市指定有形文化財)は今年、築造2000年を迎える。500橋余りある大分県内の石造アーチ橋のうち、日田市の筏場目鏡橋(1806年)、臼杵市の通の車橋(1813年許可)に次いで、3番目に古い。

古殿橋は単アーチ橋。壁石は乱積みの打ち込み接ぎで、拱頂部がややつぶれた形状である。径間は5.6m、橋幅1.8m。その狭い橋幅から、間道に架けられた石橋だと考えられる。

架橋から100年余り後の1920(大正9)年に、同じ径間で橋幅2.8mの石造単アーチ橋(古殿2号橋、架橋記念碑あり)が下流側に架けられ、路面が拡幅された。すぐ上流には河水が流れ込む池があり、はけ口から常に水が流れ出ている。この池の貯水機能が増水時に橋にかかる水圧を緩和し、橋の長生きに貢献したようだ。

要石両脇の輪石下面には、左岸側に架設年と寄進者名が、「文化十四丁丑年九月吉日/此橋供養主當村住小野忠兵衛」と刻まれている。地元の小野忠兵衛が近親者などの追善供養のために架けたと受け取ることができる。

右岸側の輪石下面には、「野津原手永田ノ小野村ノ石工頭料阿部清右工門ノ同名茂助ノ當村孫左工門」と、施工者の名も分かる。石工頭料(頭領)の阿部清右工門は、職人ながら苗字を名乗っている。住所は野津原手永の田ノ小野村で、現在の大分県由布市挾間町大字鬼崎田の小野。そこは「豊後街道」沿いの熊本藩領(飛び地)である。豊後・熊本藩領の石工が岡藩領で地元の石工、孫左工門と古殿橋を築造していることは、石橋構築技術の伝播を知る上で貴重である。

同橋は、朝倉文夫記念館*から県道657号を西へ1kmの向原川に架かる。現在は路面がアスファルトで舗装されていて、やや下流に架けられたバイパス橋(新古殿橋)に実用橋の役割を譲っている。

この200年の間に世の中は大きく様変わりし、今は橋を渡る牛馬や荷車の姿は見られない。役割を懸命に務めた昔を回想し静かにたたずむ古老のように、古殿橋は今も築造時と同じ場所にある。

(中村まさあき)

* 朝倉文夫は地元出身の彫刻・彫塑家
参考文献/「おおいの石橋」(大分の石橋を研究する会編)、「伝えたい ふるさとの石橋」(岡崎文雄著、大分県郷土史料集成取材協力/高野弘之氏(豊後大野市教育委員会・社会教育課文化財係))

中面の案内

- 2面 石橋の顕彰・保全への取り組み
- 5面 注目集めた肥後種山石工技術継承講座(尾上一哉)
- 6面 通潤橋修復へ、二俣福良渡修復工事始まる
- 7面 激震地に架かる舞堂橋(中村秀樹)

石橋文化を周知、次世代へ 顕彰・保全に取り組み各地の団体

九州を中心に各地に残る貴重な石橋。しかし、河川や道路などの整備工事、豪雨による被災などで撤去されてしまう石橋もある。それに対し、各地域では石橋の文化財としての価値を認め、その顕彰・保全に取り組み団体がある。ここでは石橋を、地域を特色づける貴重な宝とする活動を続ける6つの団体を紹介する。

◎山鹿文化財を守る会 熊本・山鹿市

「山鹿文化財を守る会」は熊本県山鹿市が位置する、県北部の文化財の保護を目的に1970年に発足した。地域には県内最古の洞口橋（1774年架設、1



平山温泉内の公園に移設保存された平山橋
(2017年2月、写真提供/坂本重義)

994年移設復元や、全国でも屈指の数を誇る装飾古墳が存在している。

近年は、山鹿市の平山温泉街を流れる岩村川に架かっていた平山橋（1861年架設）が撤去される動きに対して保存運動を展開し、同温泉内に公園を整備し、そこへ同橋の移設保存を実現した。2015年に移設が竣工した平山橋は、温泉のランドマークとなっている。

その他、弥生時代後期から古墳時代前期ごろの県内最大級集落遺跡である、方保田東原（かとうだひがしばる）遺跡の周知等に貢献する活動や、山鹿市立博物館とその友の会が企画する活動にも協力している。

山鹿文化財を守る会
会長 上妻 信寛 会員18人
事務局 坂本 重義
〒861-0302 熊本県山鹿市鹿本町津袋494
TEL 0968-46-5673

◎山都町の石橋を守る会 熊本・山都町

熊本県上益城郡山都町の聖橋（1832年架設）の保存を実現した「聖橋を守る会」（1991年発足）を前身とし、同町の石橋の保存・活用と町民の石橋文



本震後に漏水が発生した通潤橋（昨年4月16日、写真提供/尾上一哉）

化向上に資することを目的に2011年、「山都町の石橋を守る会」に名称を変更した。

13年12月には夕尺橋が河川改修のため撤去されることになったため保存に向け、地元区長と連名で行政に申し入れるなど保存運動を展開。その結果、解体された石材が保存されることとなった。現在は、その復元場所の確保が課題となっている。

また昨年は、熊本地震の影響で漏水が発生した通潤橋（国指定重要文化財）の修復のため、会から支援金を町に寄付した。

今後は、町内の19基の石橋のほか、町外の石橋の被害や復旧状況の把握を計画している。

山都町の石橋を守る会
会長 浜田 浩二 会員50人
事務局 石山 信次郎
〒861-3513 熊本県上益城郡山都町下市27
TEL 0967-72-0240

◎吉井エコツーリズムふるさと会 長崎・佐世保市

「吉井エコツーリズムふるさと会」は、2008年に長崎県佐世保市吉井町の有志によって組織された。吉井町周辺には、豊かな自然とともに、歴史・文化関連遺産が数多く残る。そうした素晴らしい地域の資源を大切に共有し、次世代に語り継ぐことを目的に、イベントや

地域の紹介などの活動を展開している。

イベントとしては、①ハマダイコンが咲く五臓大池の景観を楽しみながら約4キロを歩く「五臓大池周遊ウォークツアー」②中世の山城、直谷城跡（県指定史跡）や福井洞窟（国指定史跡）のガイドと体験ツアー③佐々川流域の石橋群31基

を対象とした「佐々川流域の石橋群フォト・絵画コンテスト」を開催し、表彰と3カ所で開催を行っている。

地域ガイドとしては、①「直谷城跡」(年間約200人)②石橋(年間約100人)③五臓大池(年間約20人)④北松道



季節の花が咲く曲川石橋公園(写真提供/末永暢雄)

道など。

整備事業としては、①直谷城跡の整備(佐世保市委託事業、年間約4回)②吉井町の8基の石橋の除草等(同委託事業、2年間で8回)③曲川石橋公園の整備。この公園は同会が10年前に曲川橋(石橋)周辺の荒地地約500坪を借り上げ、石橋を学べる公園として整備したもので、実際に石橋の築造を体験する「石橋塾」で架けた2基の石橋もある。桜やアジサイ、モミジ等が植えられ、憩いの場所になりつつある。

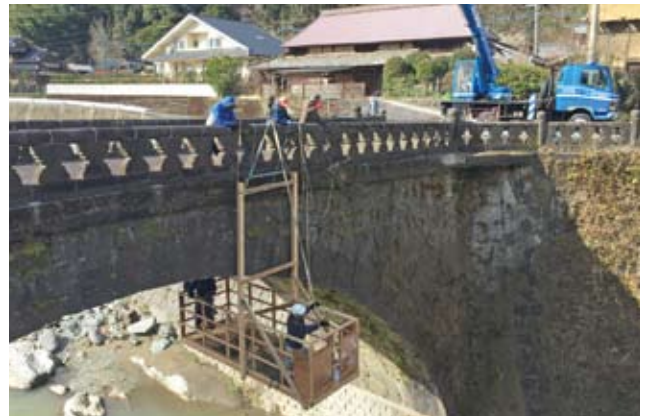
今後は、吉井町のコンクリート造りの3つのアーチ橋(登録有形文化財)の整備と、観光資源としての活用を図る計画が練られている。

吉井エコツーリズムふるさと会
会長 末永 暢雄 会員23人
事務局 末永 暢雄
〒859-6322 長崎県佐世保市吉井町踊瀬720
TEL 0956-64-2710
メール suenaga@e-yoshii.net
http://www.e-yoshii.net/

◎八女上陽の「ひふみよ橋」を守る会

「八女上陽の『ひふみよ橋』を守る会」は、2012年九州北部豪雨で被災した、福岡県八女市の星野川に架かる上流から順に1・2・3・4連アーチの石橋群 洗玉橋、寄口橋、大瀬橋、宮ヶ原橋、通称「ひふみよ橋」の早期復旧を願い、被災の2カ月後に発足。ひふみよ橋

およびその文化的価値を大切に守ることを目的とし、国・県や市へ陳情活動を実施した。その結果、最も損傷が激しかった宮ヶ原橋を含む4橋の現地保存が実現。宮ヶ原橋では右岸側の河道を拡幅して分水路を設け、中州から右岸側に新たな橋を



手製ゴンドラを使った洗玉橋の清掃作業の様子(昨年2月、写真提供/同会)

架設して石橋につなぐことで、将来の洪水被害を抑制する工法が採用された。この工事は今年6月までの完成を目指している。

また一昨年は、単一アーチの洗玉橋の

◎院内石橋群景観保全協議会

「院内石橋群景観保全協議会」は、大分県宇佐市院内町に現存する石橋群の景観保全活動を通じて、それらが形成する歴史的・文化的景観を守り、育み、創り、継承することを目的とし、2014年に結成された。これまで、石橋の点検や広報啓発活動、情報収集のほか、まちづくり支援や各種調査・研究を通じて、院内

輪石中央部が一部剥落したため、市へ早急な対策工事と、ひふみよ橋の市文化財指定を要望した。その結果、昨年7月に輪石剥落防止工事が完了。文化財指定については、市教育委員会でも検討中である。

昨年は手製ゴンドラによる洗玉橋清掃(年1回)をスタート。今年から地元小学3年生を対象とした「ホタルと石橋」学習会(授業の一環)を実施する。こうした取り組みを毎年続けることにより、石橋保全活動の次世代後継者の育成を図っている。また今年には、大瀬橋が架橋100年。宮ヶ原橋の復旧と

八女上陽の「ひふみよ橋」を守る会
会長 久間 一正 会員58人(賛助会員を除く)
事務局 小井手 恒則、内田 理絵
〒834-1102 福岡県八女市上陽町北川内589-2
(ほたると石橋の館内) TEL 0943-54-2150
メール info-hotaru@joyo-town.jp
http://www.joyo-town.jp/

石橋群の魅力アップと良好な景観づくりに取り組んでいる。

院内町には76基の石橋が存在する。その全てを対象にした点検には、独自のマニュアルを作成して現状を把握し、安全性や使用に悪影響を及ぼすと思われる損傷等の早期発見と、効率的な維持管理に必要な基礎資料の収集などを進めて

いる。また、地域住民や地元の小学生を対象とした出前講座を実施。参加者は石橋に対し高い関心を示しており、会とし



石橋定期点検の様子(2015年11月、写真提供/同会)

て活動の意義に手応えを得ている。今後は地域づくりに取り組み各種団体等と連携し、河川のオープンスペースを活用した「石橋カフェ社会実験」や、「住民向け石積み技術者養成講習会」の開催を計画している。

「石橋と地域と人をつなぐ役割を果たすことをモットーに、息の長い活動を続けていきたい」と、これからの活動にも意欲的である。

5月13・14日は同会の支援を受け、本会の第38回大会が宇佐市内町で開催される。

院内石橋群景観保全協議会
会長 山尾 敏孝(熊本大学大学院先端科学研究部) 会員17人
事務局 宇佐市建設水道部都市計画課(池田・吉用) 〒879-0492 大分県宇佐市大字上田1030-1
TEL 0978-27-8180
メール tosi11@city.usa.oita.jp

◎美里町石橋愛好会 熊本・美里町

「美里町石橋愛好会」は2015年7月に熊本県下益城郡美里町で発足した。同町は熊本県中央部を流れる緑川流域の山間部に位置し、霊台橋(1847年架設、国指定重要文化財)をはじめ、数多くの石橋が集まる地域。同会は、そうした貴重な石橋の歴史と文化遺産としての価値を再確認するとともに、それら石橋群を地域おこしに最大限に活用することを目的としている。

昨年は4月の熊本地震に続き、6月は大雨に見舞われ、美里町では井竿橋が流失し、下用米橋や西ノ鶴橋、白岩橋なども被害を受けた。そこで会では、熊本地震と大雨による石橋の被害状況を調査し、その結果を昨年9月発行の会報「美里のいしばし創刊号」で紹介している。

昨年は石橋ばかりでなく、地震ならびに大雨により大きな損害を被った会員も多かったため、当初の活動予定が大幅に

会報「美里のいしばし創刊号」の表紙



遅れ、その内容の再検討を余儀なくされている。

今後は美里町(行政)との情報の共有会としての被災石橋復旧への貢献策の中心や、会員および町民への情報発信の在り方などについて検討している。

美里石橋愛好会
会長 一村 一博 会員43人
事務局 一村 一博
〒862-0912 熊本県市東区錦ヶ丘18-20-403(臨時)
TEL 096-369-2156
メール kazuhiro2156@gmail.com

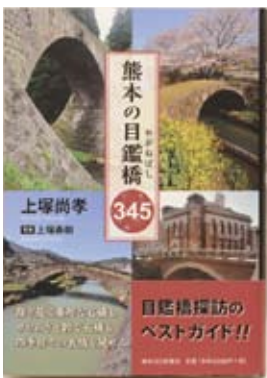
これまで主に石橋の顕彰・保全を指して活動する6つの団体を紹介した。各団体は地域の特色を生かした活動を展開することで、石橋が地域の文化財であるという認識を広げようとしている。それは「日本の石橋を守る会」の目的と一致するものであり、各団体の一層の発展は、本会の発展にも直結する。今回の紹介内容が、各団体の活動の参考にできれば幸甚である。(広報部)

上塚尚孝著・上塚寿朗撮影 「熊本の目鑑橋345」 熊日出版文化賞に輝く

熊本県内の石造アーチ橋を網羅した「熊本の目鑑橋345」(熊本日日新聞社発行)が、このほど第38回熊日出版文化賞に決定した。著者は上塚尚孝事務局長(熊本県、東陽石匠館名誉館長)。この賞は毎年、県内の個人・団体の著作を顕彰するもので、今回は2016年に刊行された約80点を対象に選定され、ほかに2点が同賞に輝いた。

出版に際し上塚事務局長は、熊本県内のめがね橋をあらためて現地取材。掲載写真は、二男の寿朗氏が撮影した。熊本地震の影響で発行が延びたが、被災した橋も震災前の美しい姿を本に残している。各橋は詳しい地図とともに紹介され、巻末には熊本の目鑑橋一覧や架設年表が付き、資料としての価値も高い。

今回の受賞で、熊本の石橋探訪のベストガイドとしての評価が、さらに高まったと言える。

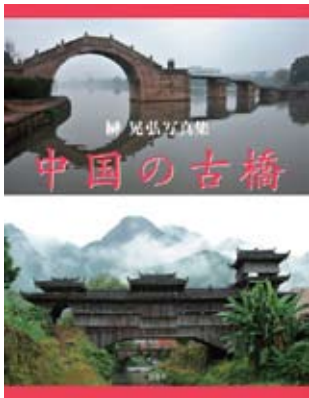


熊本の目鑑橋345
上塚尚孝 著、上塚寿朗 撮影
熊本日日新聞社
本体3,000円+税

榊 晃弘氏に青木秀賞(福岡文化連盟)

福岡文化連盟は1月12日、写真家の榊晃弘氏(福岡県会員)に第5回青木秀(しげる)賞を贈った。福岡の文化や芸術、芸能の振興に努めた同連盟名誉顧問(故人、西日本新聞社の元社長・会長)の名を冠した賞で、優れた業績を挙げ、その活動において顕著な功績があると認められる会員に贈られる。

榊氏はこれまで、写真集/写真展「装飾古墳」で1973年度日本写真協会新人賞、「眼鏡橋」で84年度同協会年度賞と土木学会著作賞、93年度に福岡市文化賞、2003年度に福岡県教育文化表彰、13年度に地域文化功労者文部科学大臣表彰を受けている。



写真集「中国の古橋(てきょう)」
花乱社発行(5,200円+税)

昨年3月には、4年をかけて中国の隋から清までの時代の代表的な古橋(てきょう)165カ所を撮影した榊晃弘写真集「中国の古橋」を刊行した。会員はメール注文で、5000円(送料・税・振込料込み、限定80冊)。
sakakireto@com.home.ne.jp

琵琶湖博物館に石橋検索システム



琵琶湖博物館の石橋検索コーナー

滋賀県立琵琶湖博物館では民間人が研究する情報の紹介を進めている。博物館のリニューアルに伴い昨年7月14日には、森野秀三氏(滋賀県会員)が集めた石橋の情報を基に、滋賀県の石橋検索コーナーを2階C展示室(有料)に開設した。

滋賀県は石垣築造で名高い「穴太(あのと)石工」のふるさとであり、甲賀市や湖南市の神社に架かる特徴ある反り橋をはじめ、石造文化財に関する見どころが多い。

「今後もさらに検索できる情報を充実させます」と、森野氏は石橋の紹介に取り組んでいる。

「肥後種山石工技術継承講座」(石橋構築・修復技術者養成事業) 各方面から注目・評価された第6期

技術部長 尾上一哉(熊本県)
2016年度(第6期)の石橋構築・修復技術者養成事業は、5月に受講者を募集し、7月に説明会を開催した。実習・研修・座学からなる全12回の講座に、初心者から現役のプロまで19人が参加。8月から土曜を中心に講座を開いた。

実習では兄弟子5人が指導し、山都町緑地広場で花連橋の壁石や路面敷石などの組み立てに取り組んだ。また、九州北部豪雨で被災した福岡県八女市の洗玉橋の修理や、保存を前提とした本の眼鏡橋(同市)の解体に受講者の半数以上が関わり、実橋工事の現場を経験した。

「一般社団法人石造文化財技術機構」(山尾敏孝理事長)の石工技術者資格取得を目指した修了試験を12月に行い、受講者のうち28歳から68歳まで14人の修了を認定。その後の和気あいあいの忘年会の席で同窓会が発足した。中には、熊本隣の遠くは和歌山県から住民票を移した強者もあり、地震で被災した熊本城の修復を意識した受講者も多かった。

今後は、種山石工の石橋の技を基本に、穴太石工との連携を図る予定である。講座は進化したついで、事業の意義と責任の重さが増している。

第6期は事業の社会的意義が高く評価された。10月に上塚尚孝・実行委員長が「国際ソロプチミスト熊本ーすみれ」から、11月に日本の石橋を守る会が「公益財団法人ソロプチミスト日本財団」から、それぞれ「社会ボランティア賞」を受賞。加えて新聞6紙以上、地元テレビ局数社から取材を受けた。

それらは受講者の励みとなり、モチベーションは奔騰した。が、それは吉か凶か。受講者が新聞などの記事やテレビ番組に取り上げられることが今後も続きそうである。老婆心ながら、何かが揺らいでいる。

石匠は「道」である。心技体の総力は、岩のごとく堅く静かに、と心得たい。

「中国の古橋」は、中国の古橋を撮影した写真集。花乱社発行(5,200円+税)。



実習で取り組んだ花連橋での記念写真
=2016年12月3日、山都町緑地広場、尾上一哉提供

総理大臣所信表明演説にも登場 通潤橋(熊本・山都町)修復へ

昨年9月26日の国会で安倍首相は、将来への不透明感が増す国の現状に対し、所信表明演説の中で、熊本・山都町の通潤橋と、その架橋に尽力した布田保之助の業績に触れた。

「高さ20メートルの石橋は当時存在しませんでした。30億円を超える費用を捻出しなければならぬ。高い水圧、大雨、想定外の事態に何度も失敗しました」

「それでも、保之助は、決して諦めませんでした。30年以上にわたる挑戦の末に、『通潤橋』を完成させました。熊本地震で一部損壊したものの、今でも現役」

「まさに『未来への懸け橋』となりました」(所信表明演説より抜粋)

石造通水管の漆喰(しっくい)などが被災したため放水が中止され、周辺への立ち入りが規制されている通潤橋だが、山都町教育委員会は2018年度末までの修復を目指し、この3月には路面の土を掘削する調査に着手し、通水管の修理を進める計画を発表している。

通潤橋築造は、まさに先人たちの偉業。地元の誇りでもある。現存する石橋は、築造に懸けた人々の思いや精神を知るための懸け橋となる存在でもある。



津留川に架かる二俣福良渡
(熊本・美里町、今年2月18日中村まさあき撮影)

修復へ向け工事が進む 二俣福良渡(熊本・美里町)

熊本地震で右岸側の壁石が崩れ、輪石にも亀裂が入るなど、被害が生じた下益城郡美里町の津留川に架かる二俣福良渡(ふたまたぶくらわたし、町指定有形文化財)だが、今年1月下旬から修復工事が行われている。石材に番号が付けられ、残った高欄が取り外され、支保工が設置された。今後は、壁石と輪石をいったん解体した後、組み立てが行われる。工事の過程では、上流側壁石の内側にコンクリートで補強された箇所があることが判明した。現場を見た上塚尚孝事務局長は町教育委員会に問い合わせたが、その工事の記録は残っていない。工事は本年度(第6期)肥後種山石工技術継承講座の修了者の数人が参加し、修復の現場で腕を磨いている。工事の終了は10月と発表されている。

鹿児島・熊本の石橋が大雨により流失

昨年は地震だけでなく、記録的な大雨も発生し、石橋が被災。6月に熊本県の石橋、9月には鹿児島県で最古級の恒吉太古橋が流失するなどの被害が発生した。

写真提供/中村まさあき

昨年は、熊本地震で被災したものの持ちこたえた宇城市の安見下鶴橋(1848年架設、橋長25.5メートル)が、梅雨の大雨で流失した。下益城郡美里町でも井竿橋(いさおばし、橋長8メートル)が流失、下用米橋(しもようらいばし、橋長6メートル)は壁石が流失して輪石のみの姿となり、西ノ鶴橋(橋長22メートル)は上流側の輪石付近に流れしてきた石が詰まり、下流右岸の取付護岸が洗掘されている。この6月20日夜から21日にかけての大雨は、1時間降水量で、甲佐町150ミリ、宇土市宇土122ミリを記録し、観測史上1位を更新*した。

秋には、九州南部から西日本の太平洋沿岸を通り、鹿兒島県で最古級の石橋である曾於市の恒吉太古橋(1790年架設、橋長15.5メートル)が流失した。16号は中心気圧約955hPaで9月20日に大隅半島に上陸*。内閣府の速報によると20日未明、



流失する前の恒吉太古橋
(鹿児島・曾於市、2012年撮影)

鹿児島県枕崎市で1時間当たり115ミリ、霧島市で96ミリの大雨を記録。天災に対する石橋保全の課題を突きつけられた。

*気象庁の速報



西ノ鶴橋(熊本・美里町、昨年9月撮影)



下用米橋(熊本・美里町、昨年9月撮影)



井竿橋の跡(熊本・美里町、昨年9月撮影)

激震地に架かる舞堂橋 熊本・南阿蘇村 石造アーチの耐久性を示す

昨年の地震により、阿蘇外輪山の山肌が大きく崩れた熊本県阿蘇郡南阿蘇村の立野地区。幹線道路である国道57号は今もそこで寸断された状態が続く。国道脇の山の斜面には、1914(大正3)年に建設された水力発電所からの放水路に、石造アーチ構造の舞堂橋が架かっている。激震に見舞われた同橋がどうなっているのか。調査のため昨年11月、調査研究部の中村秀樹部長が現地を訪れた。

石橋の構造を学ぶ上で貴重

調査研究部長 中村秀樹(熊本県)
昨年9月、上塚尚孝・事務局長から、熊本地震の激震地だった「南阿蘇村立野地区の舞堂橋(まいどうはし)は大丈夫

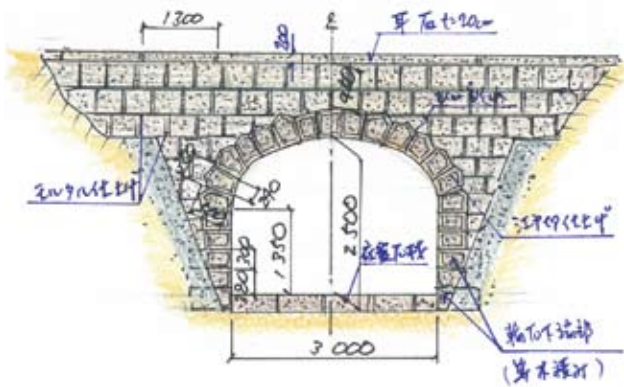
だったろうか。見てきて欲しい」と相談を受けた。当時の私は震災と、その後の豪雨災害関連業務で多忙を極めていたため、調査の実施は11月になった。ただ、現地では舞堂橋を探すが見つから

ない。住民の方に聞くと橋は、立野集落の北側の山から流下する九州電力水力発電所の放水路が旧県道下を潜る場所にあった。そこは震災で家屋が倒壊し、資料写真とは全く風景が変わっていた。被災状況調査は、近接目視でないと詳細が明らかにならない。入河場所を探していると、タイミングよく同橋下流右岸側の住民の方が、被災した自宅の片付けのため帰って来られていた。事情を説明し、その方に同橋の入口まで案内いただき、さらに河床に降りるための梯子まで貸していただいた。

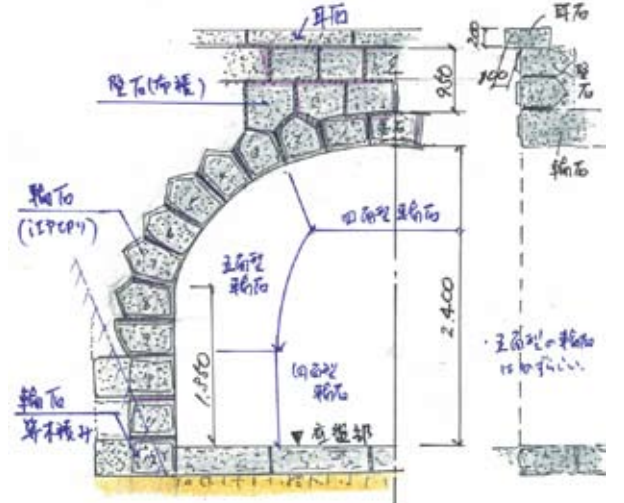


呑口よりアーチ内部。石材表面に土石流の泥が付着し、一部に水がしみ出ている(2016年11月中村秀樹撮影)

略図① 吐口部正面



略図② 吐口部正面近景



やと近接目視調査を開始。下流側石橋正面形状は、高さ1・35メートルまでは垂直をなし、その上は三芯円のアーチ形状の幅3メートル、高さ2・4メートルの水路兼用石橋である(略図①)。要石とその隣の輪石は四角形で、他の輪石は五角形の江戸切仕上げ。五角形輪石は下幅24センチ、上幅35センチ、高さ50センチ、輪石長75〜80センチで、輪石間の隙間がなく丁寧に石材加工が施されている。

激震による石橋本体の被災状況は、輪石にわずかなひび割れがあるものの健全である。特筆すべきは、基礎部から3石(長さ約60〜70センチ)まで算木積みになっている(略図②)。これは地震に強い構造であることから、大正時代の石橋関係技術者の知恵であるといえる。さらに底盤部には40センチの敷石が施されており、呑

口部より3石分(約1・2メートル)が布積み、それより下流側が乱積み構造で洗掘にも強い。この底盤石材の構造も強震に対し、効果的に耐久力を働かせたようだ。
なお、同橋の設計は明治40年9月、東京博文館蔵版「土木実用アーチ設計法」(松永工・飯田耕一)を参考にされたと考える。

昨年地震により熊本県内の石橋の被災が数多く報告された中、舞堂橋はほぼ無傷の状態であり、健全であったことは、石橋の歴史変遷を学ぶ上で、また専門的な石橋構造を理解・把握する上でも、貴重な存在である。

石橋のふる風

院内町の石橋62基を初めて回ったときは、胸の高鳴りがやまなかったことを思い出す。それから何度もこの石橋の町を訪ねている。院内町の石橋といえば、



「中島橋」のぶながすえ
大分県宇佐市院内町

「石橋の貴婦人」と呼ばれる鳥居橋の「高く細い橋脚」に代表されるように、人工美(知恵と技にあふれ、しかも自然と一体となった橋の姿に圧倒される。富士見橋、荒瀬橋、御査橋、水雲(すのり)橋、そつした見事な石橋を築造した偉大な石工、松田新之助の伝記にも心動かされる。私は石橋を川から見上げないと気がすまない。谷が深い恵良川の流域では、何度も足を滑らせ苦労した思い出もある。

中島橋も院内川の深い谷に架かる。ただ、この橋のそばには川へ降りる道がある。石桁の門をくぐるのも楽しい。この橋もまた、松田新之助の技になる石橋なのだ。

中島橋は壁石が自然石で積まれている。絵を描く人間にとつては楽しくなる石橋だ。数年ぶりに訪れると橋は、すっぽりと雑木に包まれていた。木漏れ日が差す葉陰の中島橋を眺め、しばらく水と遊び、別れた。

(水彩画、文||末永暢雄)

熊本で昨年開催された石橋イベント報告

石橋プレサミット||昨年11月

今年、熊本県上益城郡山都町で開催される全国石橋サミットの機運を盛り上げようと、プレイベントとして昨年11月25日、同町の清和文楽館で「石橋プレサミット前ト」が開催された。主催は緑川流域広域連携事業実行委員会。

前半は「緑川流域の目鑑橋 被害状況と修復について」をテーマに上塚尚孝・肥後種山石工技術継承講座実行委員長と尾上一哉・

同講座世話役の対談形式による基調講演&基調報告。後半は「石橋の魅力」を語りつと題して、山都町の岡本哲夫副町長がコーディネーターを務め、パネルディスカッションが行われた。パネリストは山都町立図書館の下田美鈴前館長、美里フットパス協会の井澤るり子副会長、一般社団法人御船町観光協会の沖田昌史副会長。

石橋フォーラム||昨年12月

昨年12月4日には熊本県八代市東陽町で、「種山石工勘五郎の

里 石橋フォーラム」が開催された。主催は八代市。

上塚尚孝氏の基調講演「種山石工・橋本勘五郎の里で石橋の魅力」に続き、「石橋の魅力」を地域の活性化につなげるために「をテーマに事例報告が行われた。報告者は東陽石匠館の中野敏憲館長、通潤橋史料館の石山信次郎館長、八女上陽の「ひふみよ橋」を守る会の久間政幸理事。その後、上塚事務局長をコーディネーターに、パネルディスカッションが行われた。

大会情報 第38回大会は2017年5月13・14日 大分県宇佐市院内町で開催予定

上記の日程で今年、第38回大会が予定されています。場所は昨年、熊本地震により中止された大分県宇佐市院内町。詳細は事務局から通知されます。

日本の石橋を守る会 ~石橋とその文化を大切に~

会報90号(通算) 2017(平成29)年3月19日発行

代表者 会長 甲斐 利幸
事務局 〒861-3513 熊本県上益城郡山都町下市182-2
通潤橋史料館内 ☎0967(72)3360
HP <http://www.ishibashi-mamorukai.jp>
BBS <http://9328.teacup.com/jsbp/bbs/>

編集後記

本号では紹介できなかった情報がありました。一つは、かごしま県民交流センターで昨年12月に行われた、第5回西田橋の実物大拓本展示です。拓本は同橋が解体移築される直前の1996年に、地元有志らによって作成されたものです。現地保存を望んだ皆さんの思いが伝わってくる催しでした。もう一つは、滋賀県立琵琶湖博物館で開催(3月4日~26日)の森野秀三さんの写真展「石橋まんぼ」のお知らせです。もし間に合う方は、会場に足を運んでください。

会員の皆さんへのお知らせなどがあれば、会のホームページやネット掲示板も利用できますので、情報をお寄せください。(会報担当 中村まさあき)